

シンポジウム「変革期の歴史地理」を考える

青木 栄一

I. シンポジウムの企画

歴史地理学会では、平成元年度の大会共通課題として「変革期の歴史地理」をとりあげ、さらに平成2年度大会においてもこのテーマを継続して採択することになった。しかし、テーマとしては同一であっても、平成2年度大会における共通課題のとりあげ方は、従来とはまったく異なるシンポジウム形式が採用された。

従来は、共通課題と称しても、公募に応じた発表者各自がその課題に何らかの意味で関連があると考えたテーマで個々に発表していたのであり、発表者と参会者との間に、全体にわたる共通の関心は生まれなかった。しかし、平成2年度大会からは、発表者とそのテーマをあらかじめ慎重に選択し、共通課題のもつ全体像と問題点を参会者が体系的に理解し、討論によってその理解をさらに深めることができるような形式の導入が主張された。

このような考え方に基づいて、平成2年度大会では、次のように基調報告（「歴史地理学は変革期を如何にとらえるか」）2編、課題報告（「都市、農業・農村、交通・運輸の変革期」）3編について、報告者、コメンテーターが依頼された。

〔基調報告〕

- ・地域的スケールの対応からみた「変革期」：
浮田典良（関西学院大）
- ・「変革期」の歴史地理学：
千葉徳爾（明治大）

〔課題報告〕

- ・都市形態の変革期と都市社会の変革期：
足利健亮（京大）

- ・農業・農村の変革期：溝口常俊（富山大）
- ・交通・運輸の変遷とその変革期の諸問題：
木下 良（国学院大）
コメンテーター 山田安彦（千葉大）
小倉 真（日本大）
富岡儀八（大阪商業大）

残念ながら、浮田典良氏の報告は大会当日の同氏の急病のため実現せず、基調報告が1編となったが、課題報告3編とコメンテーターの所論発表は予定通り行なわれて、その後の討論も予定時間一杯、活発になされた。

『歴史地理学』本号では、このシンポジウムにおける発表者とコメンテーターの所論、およびそのあとに展開された約2時間半にわたる討論の要旨を収録した。このようにして行なわれた第1回シンポジウムの試みの評価は会員諸兄姉の判断に委ねたいと思うが、座長団の一人としてシンポジウムに臨んだ者として、若干の私見を述べることをお許しいただきたい。

II. 変革期のとらえ方と課題報告テーマ

過去のあらゆる時代を通じ、地表上で営まれたすべての人文現象やその変容を、地域社会とそれをめぐる環境との関連で考察するとき、4つの視点が考えられる。すなわち、政治的視点、経済的視点、文化的視点、技術的視点である。「変革期」もこの4つの視点を通じて考えると、具体的となり、わかりやすい。この4つは相互に影響しあうから、現実起こった事象には、これらが混合した状態で認識されるのが普通である。

また、変革を受容するにせよ、反対するにせよ、これを受けとめるグループ（人間の集団、

社会階層など)の性格や規模、分布状態などは千差万別であって、そこに変革の規模や社会構造の変化が問題となる。

そうであれば、「変革期」とされる時代は、いかなる視点から取り上げるにせよ、変革の規模や影響する範囲が比較的に大きく、後世の研究者からみて、ある一つの時代から別の時代に変わったと認識された時代ということができよう。われわれが日常的に用いている古代、中世近世、近代といった時代区分の境界は、さまざまな意味で大きな変革期だったのであろう。しかし、具体的な地域社会やそれをめぐる環境のなかで、さまざまな事象とその変容を理解しようとする歴史地理学の世界では、多数の事例研究の積み重ねを通じて、「変革期」の実態を把握してゆく必要がある。歴史地理学でいう「変革期」とは、借りものの理論を援用した抽象的なものではなく、多くの事例研究を通じて帰納的に求められる一つの時代概念であるといえる。

「変革期」はこれまでにたくさんあったに違いない。それはその視点、社会的分野、規模、時代ごとにさまざまな認識ができるから、「変革期の歴史地理」というテーマは、まことに壮大な規模の研究テーマといえる。とても1回や2回のシンポジウムでその本質が解明できるようなものではないはずである。

「変革期の歴史地理」をテーマとするシンポジウムを企画するに当たって、いかなるサブテーマが適当であるかは、大きな議論のあるところであろう。

日本の歴史地理学はその研究史も古く、多岐にわたるテーマと取り組んできた。そのなかで研究者の層が比較的厚く、かつ広い範囲をカバーするようなテーマが今回の課題報告テーマとして選ばれた。それは性格の大きく異なる地域社会のカテゴリーとしての「都市」と「農村」であり、そして機能の異なる地域社会相互を結びつける「交通」であった。それぞれの分野のなかで、先にあげた4つの視点からの考察をなるべく総合的に取り上げ、「変革期」の実像に迫ってゆきたいと考えたわけである。

Ⅲ. 発展段階史観からの解放

「変革期」の考察において触れなくてはいけないものに、いわゆる「発展段階史観」がある。「発展段階史観」とは、人間の社会の歴史的变化には、ある一定の順位の発展段階がある。一つの発展段階が成熟すると、そのなかにおけるさまざまな矛盾も大きくなり、これによってそれまでの社会秩序が崩壊して、次の発展段階に移行するとする考え方である。そして、ある特定の発展段階説が世界のどの地域にも普遍的に適用でき、異なる地域間には時間的な遅速はあっても、一定の順序の発展段階を経て変化してゆくと考えられる。

多くの場に通じて適用できる法則性を見出すことは、学問を志す者にとって魅力的な目標である。歴史には発展の法則があり、その法則を発見することやその法則の正しさを検証することが歴史学の目標と考えられた時代もあった。

1930年代の「明治維新論争」において、明治維新という一つの変革期を意義づけようとする時、マルクス経済学の中での「講座派」と「労農派」との間で激しい対立をひきおこした論争は、マルクスの発展段階史観を絶対視する人々の考え方、すなわち、ヨーロッパ史上でとらえられた一連の発展段階はそのまま日本の歴史にも適用できるとする思考に共通の基盤があった。もちろん「講座派」と「労農派」の論争は、それだけで評価できるような単純なものでは決してなかったが、地域史や地理学的な感覚が欠如していたことは確かである。

論争があってから数十年の時間が経過した今日のわれわれが、両派の論争を第三者的にみて何か喜劇的なものを感じるのには、この人々がやはり無邪気ともいえるほど単純な発展段階史観を信奉していたことによるのであろう。歴史学が「科学的」たらんと努力するなかで、発展段階史観のとりことになったのは、長い研究史の上からみると、試行錯誤の一駒であったといえようか。

筆者は、世界のどの地域にも適用できると称

する発展段階史観のようなものは信用していない。したがって、変革期を理解するためには、地域の規模の大小はあるにせよ、個々の地域における具体的な事例研究を数多く行ない、これらの成果から帰納的に共通点と相違点を見出して、その要因を考察してゆくことが、一見迂遠にみえても正攻法であり、間違いのない方法であると思っている。

「木を見て林を見ず」という格言がある。この格言は、個別的な事例研究に没頭している研究者にしばしば投げかけられる、やや軽侮の意志をこめた言葉としても用いられる。しかし、木の種類や植生の実態がわからず、遠くから林を眺めているだけでは、本当の林の姿を理解するのは不可能なのではないか。個別的な事例研究をせず、「大所高所」（と彼は信じている）だけからマクロにしかものをみようとしなない研究姿勢に、筆者は賛同できないのである。

IV. 結 語

筆者は、地理学という学問は、さまざまな人間にかかわる現象を地域社会の性格を通して理

解しうる、一つの学問体系であると考えている。そして、分析の視点も政治的、経済的、文化的、技術的、等々多岐にわたって制約がなく、これらを総合して人間の営んできた現象を説明してゆくところに地理学の基本路線がある。歴史地理学は過去からの変化のなかでさまざまな地域現象を理解してゆく方法の上に立っているだけに、「変革期」の考察に当たっても、個別の事例研究に立脚したミクロな研究の積み重ねの上に、マクロな見解を帰納的に展開するべきであろう。

「変革期」という時代は研究者にとって面白く、そして興味関心をひく時代である。「変革期の歴史地理」を共通課題としたこのシンポジウムの評価はさまざまに分かれるかもしれないが、「変革期」というものの認識をあらためて考えてみたことは、歴史地理学の研究にとって重要なステップを記録したのではないだろうか。その意味でこのシンポジウムの記録が、体系的な「変革期の歴史地理」をつくりあげてゆく礎石となることを期待したい。

（東京学芸大学）